理想の授業 ―第三講―

園芸を通じて得る「やさしさ」の再発見

恵泉女学園大学「生活園芸」

「理想の授業第三講」は、恵泉女学園大学（東京都多摩市）が行う「生活園芸」。女子大学で園芸実習をするという、とてもユニークな取り組みを行っている。

「園芸」は、同大の教育理念の三本柱の一つ。教育機関で初めてＪＡＳ（日本農林規格）法の有機認証を取得したという教育農場で、学生たちは、土に触れ、自然を肌に触れていると、何気なく過ごしている日常の忘れた部分を思い出す。最初は嫌がる学生も、授業が終わる頃には好きな授業に変わるという、この「生活園芸」という授業をリポートする。

「いのち」を育む楽しさ体験

恵泉女学園大学の人気ナンバーワン授業「生活園芸」。簡単に説明すれば、キャンパスに隣接した教育農場で、野菜や花を栽培する実習授業だ。2人1組に割り当てられた畑で、土づくりから収穫まで全過程を行う。

真の目的は、園芸の技術を身につけることではない。利便性にどっぷりつかった現代の生活を見直すことにある。

春学期には、ジャガイモ、キュウリ、サツマイモ、またドライフラワーとして楽しめるセンニチコウなどを植える。秋学期には、ダイコン、ハクサイ、ホウレンソウ、チンゲンサイなど、その季節の作物を育てていく。

ユニークなのは、有機栽培で植物を育てること。利便性や効率が優先される現代社会では、手間暇かけることを惜しむ風潮が強い。そのため、食糧を得ることの大変さ、環境問題などに気づくことがなく育ってきた若者が多くなっている。だからこそ、農業や化学肥料を使用せず、地域からもらった牛糞、鶏糞、米ぬかなどを用い、有機農業の方法を採用することには、とても深い意味があるのだ。

「長靴をはいた女子大生」。これは恵泉の学生が考えたコピー

人間社会学部・人間環境学科の樋口幸男准教授は「手間暇かけないと、安全なものはつくれません。例えば、安全なキュウリ一本作るにも、こんなに手間暇かかるものなのだということを理解してほしい」と力説する。

また、教育農場での実習は、四季の移り変わりなどを感じることができる。春には芽吹き、秋には紅葉もみられる。さらに、野生のキジや、キツツキが木をコンコンとたたいている音、ホトトギスの鳴き声も聞こえてくる。農場にいながら、自然と共生する喜びを体感できる環境にあることも大きな魅力だ。

この授業は、教育理念の一つ「園芸」に基づいている。園芸を通し、自然を慈しむ心、生命を尊び人間の基本的なあり方を学ぶ心を育てていく。これは、同大には欠かせない教育方針だ。そのため、「生活園芸」は、全学部1年次必修授業。講義形式の授業ではなく、自らの体を使った実践授業は、学生たちにとても大きな気づきを与えるという。

ミミズに「ごめんね」の農場実習

麦わら帽子、ジャージ、長靴。この「生活園芸」の授業では、〝三種の神器〟ともいうべきものだ。これらを身につけた女子学生が教育農場にはいる。『大学ランキング』（朝日新聞社）で同大は、ファッション誌への掲載が高いと評価されているように、ファッションに気を使う学生が多い。しかし、麦わら帽子、ジャージ、長靴の〝正装〟になると、そのおしゃれなイメージが程遠くなる。そんなギャップがなんともいえず面白い。

始めは、「ださい」などと嫌がっていた学生も、慣れてくると、この格好もまったく抵抗がなくなるという。「女性だけなので、男性の目を気にしなくていい。女子大だからこそできること」と岩嵜直子さん（人間社会学部3年）と文野アスカさん（人間社会学部3年）は話す。

メインキャンパスから徒歩で5分のところに教育農場がある。

6月上旬になると、秋にできるサツマイモとキュウリを栽培する季節だ。

サツマイモを栽培する畑に行ってみると、学生たちは、畑に肥料である牛糞と落ち葉をスコップでかける作業に取り組んでいた。

《人間社会学部》岩嵜　直子さん

おいしいサツマイモになる条件は、良い土の中で育てることが大切という教授の声に、手や服を汚しながらも、笑顔で作業する学生や「体を動かす授業は楽しい」と話す学生たちが印象的だ。

サツマイモの次は、キュウリを育てている畑へ。長くなったキュウリのつるを支柱に麻ひもでとめる作業をする。初めての経験の学生が多く、慣れない手つきで作業する。周りの雑草をクワでとることも、欠かせない。苗から育てたキュウリの花が咲き、実になったうれしさに、「こんなに大きくなった」「かわいい。私のキュウリちゃん」と嬉しそう。どの学生もみんな笑顔だ。

作物と一緒に写真を撮る学生や、自分が育てたキュウリを、思わずフライングして食べてしまう学生、野菜を「わが子、わが子」とかわいがる学生の姿から、この授業の学生に与える影響の大きさを、実感させられる。

授業を受ける前は、土に触ったことがない学生もいる。有機農場だと虫がいるのは当たり前。虫が苦手という学生も多い。

しかし収穫が始まると、そんな声も次第に聞こえなくなる。収穫時には、学生たちの表情はガラッと変わり、楽しそうに取り組む様子が見られる。

「小さいキュウリも次の授業の時には、ヘチマと思うぐらい大きく成長するのです。学生たちは未経験なので、何もかもが新鮮なのですね」と樋口准教授は話す。

《人間社会学部》文野　アスカさん

ミミズが出ると、「キャーキャー」と言いながら、怖がっていた学生も、畑を耕す際、ミミズに対し、『ごめんね』と声をかけてしまう」と文野さん。

苗から育て、園芸に慣れてきた頃に、自分で植えたものがどんどん伸びていく喜びや、立派な作物になったときの感動は計り知れず大きい。

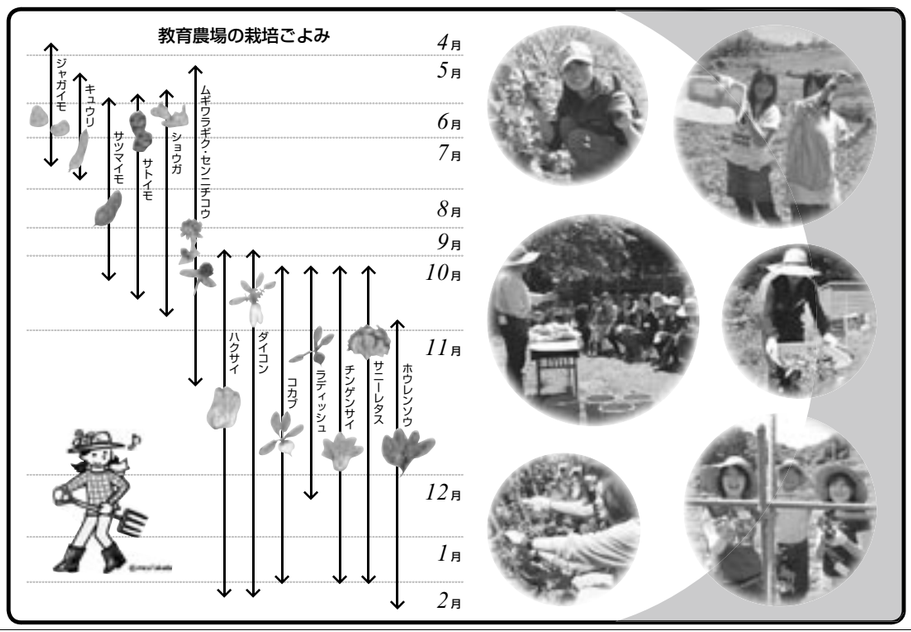
「採れたてのハクサイやダイコンはフルーツのように甘みがある」「カタチはスーパーで売っているものより、曲がっていても、新鮮で、しゃきしゃきしておいしい」と、語る学生たちは、有機栽培で手間暇かけているからこそ、おいしく安全な野菜がとれることを体で理解することができる。

「育てた野菜は、みんな大切に家に持って帰ります。自分で作った作物は絶対に無駄にしたくない」と岩嵜さんの作った野菜への思いが伝わってくる。

《教育農場までの道》
教育農場へは、徒歩で５分ほど。行き着くまでにも、草花を見ることができる。キジの鳴き声が聞こえることも。

《教育農場》
2001年に教育機関として初のＪＡＳ認定を受けた。ジャガイモ、キュウリなどを栽培する。そのうちミミズとも友だちに!?

《キャンパスの花壇》
年間を通じてさまざまな草花が咲き誇るキャンパス。いくつかある花壇の中でも、約30種のハーブと約80種の草花が植えられているハーブガーデンは学生たちの憩いの場。



恵泉女学園大学とは？

Keisen University

きれいな草花が咲き誇るキャンパス

1929年に設立された恵泉女学園普通部が母体。創立者河井道は、すべての人が平和に共に生きる世界を造るために活躍する女性を育てたいとの祈りから、同学園を創設。創立初から、「聖書」「国際」「園芸」を三本柱とした、教育理念を持つ。平成18年には、「専門性をもった教養教育としての体験学習」が特色GPに選ばれ、国内外の現場に赴いた取り組みが評価された。

学部・学科

人文学部	日本語日本文化学科 英語コミュニケーション学科 文化学科	人間社会学部	国際社会学科 人間環境学科

〒206-8586 東京都多摩市南野2-10-1
TEL　042-376-8217
http://www.keisen.jp/

土に触れることで得る気づき

自ら汗を流し、泥まみれになりながら、作物を一から育てることを体験する「生活園芸」。

このような実習を通し、学生たちは、自然破壊やリサイクル、食の安全、自分より弱い生命を犠牲にして生きている人間の存在など、さまざまなことに目がいくようになる。

岩嵜さんは、「生産者の人たちの気持ちを考えるようになり、食べ物を残していた以前と比べ、食べ物を残さないようになりました」と話す。

樋口准教授は、「ものの本質を理解できる、賢い生活者が増えていってほしい」と思いを語る。

また、「植物を栽培することにより、周りの人間関係にも影響を与えている」と話す。

「生活園芸」を受けた学生は、授業で考えたことや感じたことを書いたレポートを提出することで評価を受ける。そのレポートには、「収穫物を持って帰ると、ほとんど話さなかった祖父母と、作物がきっかけで会話がはずむようになった」「野菜をきっかけにアルバイト先の上司との関係がよくなった」など、家族や近所の人との人間関係が、円滑になったとの内容が書かれているという。

《人間社会学部》樋口　幸男　准教授

文野さんは、収穫物を近所の人へ分けたとき、「有機栽培でやっているの？　スーパーで売っているものとは違うね、と話が盛り上がったりします」と笑顔で当時のエピソードを語ってくれた。

このように園芸は、家族や地域社会とのコミュニケーションツールとしての機能も果たしている。

この授業は、園芸の技術や理論を深く教えることを目的としていない。それよりも、土に直接触れ、植物を育てることが人にもたらすもの、心豊かな日常生活を送るために、園芸が果たす役割について、学生が考えることをめざしている。

学生たちは、体を使い植物を育てながら、食糧を得ることの大変さ、手間暇かけて、作物を育てることの意味、現在起きている食糧・環境問題を自ら気づき、学んでいく。

この「生活園芸」という授業は、教育農場の管理などを考えると、高いコストがかかっている。しかし、樋口准教授は「ある程度費用がかかっても、園芸教育を大切にしていきたい」と語る。

現在、オープンキャンパスの手伝いをしている岩嵜さんと文野さんは、「生活園芸」の写真を見せたり、話したりすると、ほとんどの高校生が「楽しそう、やってみたい」と興味を持ち、会話が弾むという。それだけ魅力的な授業なのだろう。

しかし、興味を持つのは高校生だけではない。「一緒に来るお母さんの方が興味津々ですね。有機栽培であることを話すと、うきうきされています」と岩嵜さんは話す。

学生の多くが、いつの間にか、一番好きな授業になるという「生活園芸」。食糧やモノがすぐに手に入る、豊かな時代だからこそ、今、学生たちの心をゆさぶる授業なのだろう。

理念　●考える大学　●平和をめざす女性の大学　●地球大学

設置学部
人文学部　日本語日本文化学科　英語コミュニケーション学科　文化学科
人間社会学部　国際社会学科　人間環境学科

大学院　人文学研究科・文化共生専攻　人間社会学研究科・平和学専攻

問い合せ　〒206-8586東京都多摩市南野2-10-1　TEL.042-376-8217　入試広報室
e-mail : nyushi@keisen.ac.jp　パソコンから http://www.keisen.jp　ケータイから http://m.keisen.jp